

2013年12月号・季刊43号

ミンダナオの風

執筆編集*松居友/松居陽/野田杉菜/師田史子

発行:ミンダナオ子ども図書館



史上最大の台風が、レイテとサマール島を襲ったミンダナオは大丈夫だったけれども親を失って泣いている子の姿を見て放っておけずに、支援を開始

これから来年に向かって繰り返し訪れることになる。ミンダナオ子ども図書館が、

堺市の国際平和賞を、受賞したとき

同時に受賞した台湾の赤十字社の会長が

記者団の質問に答えて述べた言葉が忘れられない。

記者「どうして、台湾の方々が、これほどまでに、

東北の津波支援をされたのですか？」

会長「当然のことでしょう。隣の国の人々が、

困窮しているのを、ただ見て放っておくことなんて、

出来るわけがないじゃないですか。」

その言葉を聞いて、

ほくほ、聖書の言葉を思い出した。

「隣の人を、自分のように愛しなさい」

台湾人々は、隣の国の人々を、

自分の国の人々のように愛したのだ!

今の日本の人々には、それが出来るだろうか。

日本の隣の国と言えば、

ロシア、中国、北朝鮮、韓国、台湾、フィリピン

隣の国の人々が、心底困窮している時に

台湾の人々がしてくれたように

友情と愛を持って、中国や朝鮮やロシアに、

心底救済に向かうだろうか・・・

今日日本は、アジアで一人孤立して、

戦争を起こしかねないように見えてならない。

隣国の人々に対して心の壁をつくらずに

まずは、友だちになること。

友情と愛を優先させれば、この世に戦争は起こらない

レイテ台風被害の支援を始めた

松居友

歴史上最大の台風が、フィリピンを襲ったのは、ちょうどぼくが、日本の講演日程をこなしていたときだった。

ミンダナオ島自体は被害なく、ホツとしたが、レイテやサマル島の被害が激しく、日本でも連日のようにテレビで報道された。

そのときはまだ、ミンダナオ子ども図書館で支援に向かおうという決断はしていなかったが、テレビ画面に親を



レイテの台風被害

失って泣いている子どもたちの様子が現れたとき、とてもいたたまれない気持ちになり、現地に電話をすると、現地スタッフたちも、心を痛めていることがわかった。

「よし、レイテ支援に向かおう。ミンダナオ子ども図書館の今までの難民支援を生かして、活動を開始しよう！」

それからすぐに準備を開始して、数日後の11月26日、スタッフたちが第一次支援隊を形成して現地に向かった。大型トラック2台と小型トラックに、スタッフとMCL役員でDSWD福祉局所長補佐のソーシャルワーカーのグレイス女史、モスレムの有志やO



古着をつめるMCLの子どもたち

MIカトリック教会の仲間たちも乗りこんで4日間の支援を終えた。

その結果、一番必要としているのは、雨よけのビニールシートであることがわかった。日本のように寒冷地ではないので、古着よりも豪雨に対する雨よけが重要なのだ。

1ロール100メートルを5メートルごと子どもたちが徹夜で切って、900世帯に配って大喜びされた。もちろん日本から送られてきた、たくさん古着、ダバオで購入した懐中電灯、ライター、魚の乾物、砂糖に粉ミルクにココア・・・。

現地では、子どもたちへの、読み語



ビニールシートをカットする

りも行った。

今後もミンダナオ子ども図書館の支援方法は、戦争や洪水難民の支援の経験から次のように行っています。

- 1、まず子どもたちを対象とする。
- 2、支援物資は、直接手渡していく。
- 3、他のNGO、国際NGOなどがすでに入っているところは任せて、それ以外の困窮している場所で活動を行う
- 4、一度だけの活動ではなく、困窮している期間、活動を継続させる。
- 5、両親が居なくなった子どもたちの場合は、MCLに引き取ることも視野に入れる。

いったん始めたからには、来年にかけて繰り返し行かなくてはならない！



読み聞かせも現地で行った

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。レイテ台風支援もよろしくお願いします。



第一次台風被災地緊急支援 報告
ボランティアスタッフ 師田 史子

2013年12月8日、今日で一ヶ月が過ぎた。超大型台風30号（現地名「ヨランダ」）がフィリピン・レイテ島を直撃してから、早くも一ヶ月である。

国家災害対策局によると、これまでに5796人の死亡が確認され、400万人近くが現在も難民生活を強いられているという。最大瞬間風速105メートルともいわれる暴風雨が町を襲い、5メートル近い高潮が沿岸部に暮らす人々を飲み込んだ。「人類史上最大クラスの超大型台風」、そのように揶揄されるヨランダは、間違いなく人類の歴史に名を連ねるほどの爪痕を残していった。被災した誰もが、世界の終わりを確信したという。

2013年11月8日、ミンダナオ子ども図書館は至って平穏な一日であった。少し風が強く感じる程度で、このときはまだ、時を同じくしてヨランダが

ミンダナオ島の頭上に上陸していることなど、露程にも知らなかった。

翌日、ラジオが騒ぎだす。日本から「台風、大丈夫ですか」との連絡が山のように届く。「ん？台風？ボホール島を襲った地震の間違いか？」そんなことを考えながらインターネットのニュースを見て、愕然とした。目に飛び込んできた「被害者数百万人」「史上最大」の文字と、椰子の木があっけなく吹き飛ばされていく映像。強風で灰色に染まった町の報道写真。一体、何が起きたのか。同じフィリピンの国の中で、一体何が起きたのか。

2013年11月11日、ミンダナオ子ども図書館は台風被災地の緊急支援を決めた。驚いた。というのは、ミンダナオ子ども図書館は、名前に冠している通り、「ミンダナオ」にて活動するNGOである。レイテ島の土地勘も無ければ直接のコンタクトもなく、ミンダナオ島外の経験も無い。

今回、例外的な支援に踏み出したのは「レイテ島で多くの子どもが苦しんで」「おり、その子どもたちを放っておけない」から。この単純な理由こそが、ミンダナオ子ども図書館の立ち上げから今に至るまでの存在意義であり原動力であることを改めて思い出した。

支援の決定後、赤十字や福祉局、OMIその他各関係団体との日程の調整や支援内容の検討に早速動き出した。なにせ初めての土地、未知の状況。本当に必要な場所へ、本当に必要な支援を行うための綿密な検討が重ねられた。

支援準備の間には、保育所建設や二ヶ月に一度の学生総会などの通常活動があり、さらに奨学生の父親が反政府勢力に銃で撃たれる事件も発生した。（父親は肩と腹を撃たれ重傷、母親はその看病のため家を離れ、その間高校4年生の長女が学校を休み十人の弟妹の面倒をみていた。）レイテ島への支援計画はそれらと平行して進められた。

2013年11月26日、午前4時、トラックいっぱい日本からの支援物資を積み、レイテ島に向け出発。被災から二週間強経った頃の支援開始を



「緊急」と呼ぶには、少々時間が掛かってしまったかも知れない。既に多くの国際機関やNGOが被災直後から現地入りし、

緊急支援を開始していた。日本の自衛隊も派遣された。

日本国内でも台風被害は連日大きく報じられたことで、多くの人々がその惨状に関心を向け、緊急支援の必要性を感じただろう。ミンダナオ子ども図書館に対して、一刻も早い緊急支援の開始を期待して下さった人々も多いはずだ。

多くの人々がテレビ越し、パソコン越しで目にしたように、被災地では多くの人々・子供たちが笑顔を失っており、ミンダナオ子ども図書館もその事実を知っていた。

しかし、報道で取り上げられることは決まっていなくても、ミンダナオ子ども図書館が支援しているほんの限られた地域でも、時を同じくして笑顔を失っている子供たちがいた。先ほど述べた、父親が重傷を負った奨学生を、事件直後に訪れたときのこと。

「お父さんが肩と腹を撃たれ、病院にいる、様子はどうかかわからない。」

「学校は怖くて行けない。」
女の子は涙をこらえていた。弟妹達が不安がるからだろうか、気丈にも涙は一滴も見せなかった。逆に、ははは、と苦しうに笑った。

紛争の絶えない地域では、よくある

出来事である。ミンダナオ子ども図書館は、活動地域の範囲内のこのような子供たちを何よりもまず助けなければいけない。

「子どもを助けたい」という思いを込めて贈られる支援金をなるべく子どもたちへと使うために、人件費は最低限に抑えている。そのため、スタッフは少数のみ。加えて、ミンダナオの平和構築は遅々として進まず、争いは繰り返され、現在の活動地域だけでも笑顔を失った子どもがまだ沢山いる。現地の活動が精いっぱい、日本からの支援の拡大・獲得にも、なかなか手が回らない。限られた支援金は、子どもたちのために…。

これの堂々巡りだ。ミンダナオ子ども図書館が小さいNGOであり続ける所以である。この輪をどこかで断ち切るための一番の理想形は、支援金の増加でも、スタッフの増加でもなく、平和の構築であろう。現地スタッフは、その一番の理想に全熱量を傾けている。

笑顔をなくした子どもがいれば、難民が発生すれば、すぐ車を飛ばす。ミンダナオ子ども図書館でしかできないこと、他の大きなNGOではできないことを最優先に行っている。その結果が、被災から二週間後の台風被災地緊

急支援となったことを、理解して頂きたい。

2013年11月27日、話は逸れに逸れたが、いよいよレイテ島に足を踏み入れた。

ミンダナオ子ども図書館出発から丸一日。ミンダナオ島に近い地域では、被害らしきものは何も見当たらない。「電気がやっと今日届いたわ。まだ不安定だけど。」と港近くにカラオケ店を営む女性は言った。目には見えないが、被害はレイテ島全域に及んでいた。

更に北へ北へと車を走らせると、車窓から見える景色がだんだんと崩れていく。地滑りを起こした山が一部分だけ白くなっていたり、電線が切れていたり、バナナや椰子の木がなぎ倒されていたり。そのうちすると、被害の様子のはっきりと浮き彫りになる。つぶされた家々、ぐしゃりと支柱が崩れた体育館、根っこから倒れる大木、枝のように折れた電柱。一体何が起きたのか。何がこの町を襲ったのか。

まるでウルトラマンに出てくる怪獣が踏んづけた跡のようだった。そんな非現実を考えるとしまじらい、自然現象がそうさせたとは信じがたい光景だった。光景自体が非日常である。あ

ずの椰子の木が、あるはずの家々が、あるはずの道路標識が、あるはずの人々が、そこにはなかった。一体何が起きたのか。

その日の正午近く、オルモックという町のある村に車を止め、支援活動を開始した。車から降りると、子どもが3人、日本人を珍しがって近づいてくる。「コニキハ」と小さい声で話しかけてきた。「どこで習ったの?」

「学校に日本人の先生がいるの!」町内会館の奥まで子どもたちが案内してくれた。同じ方向に倒れたバナナ畑をかき分け進むと土台だけ残った家に着いた。壊れた家に散乱するものを漁り、「ゴリラ発見!」とにこにこ顔でぬいぐるみをつまみ上げた。「家族は大丈夫?」



「うん、みんな平気、家は壊れちゃったけど」

幸いにもこの子供達は心に深い傷を負うほどの被害には遭っておらず、まだまだ元気だった。突然陥った非日常の光景に興奮しているようにも見えた。子どもは無邪気である。

整理券を配り、支援物資を手渡していく。青い袋には衣類・靴・タオルなど日本からの支援物資に加え、ブルーシートを詰めた。ブルーシートの支援に人々から歓声が上がった。今までの支援は食糧が主で、雨風をしのぐブルーシートの供給は少なく、非常に重宝することだった。他にも、電気のない夜には欠かせない懐中電灯・ライターを配布。

「とても助かるわ。懐中電灯は売っているけれども高くてなかなか買えなかったの。」

「ここ最近は何話ばかり食べてる。いつもなら、食べ物が無ければそこら辺にあるバナナや椰子の実を食べられるけれど、今はそれすらないわ」

村の女性はやれやれと疲れた顔で語った。

物資配布の後は、子ども達へ絵本の読み語り、そして炊き出し。なんだなんだ、何が始まるんだと興味津々の面持ちで子ども達が続々と集まった。歌

レイテ支援や日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!

と踊りから始まり、最初は恥ずかしがっていた子ども達も徐々に他の子どもにつられ、最後はみんな大笑い。読み語りには真剣なまなざしが向けられ、絵本の世界にすつと引き込まれていく。久しぶりの和やかな雰囲気、憔悴しきっていた大人達も笑顔を見せた。壊れた殺風景な町に、色鮮やかな笑い声が響いた。

2013年11月28日、タクロバンの北に位置するマヨルガの町の小学校で二度目の支援活動を開始。小学校には家を失った人々、多くの子ども達も避難していた。その小学校自体も屋根が崩壊しており、教室には雨水が滴る。雨続きの天候のせいで、地面には大きな水たまりが随所に出ていた。炊き出しは、子ども達を優先に行われる。その後、妊婦、老人と続くのだが、配給は混乱を極めた。大人達が子どもの列を割り、「早くくれ!」と声を荒げる。列はすぐに崩れ、人が大量に押し寄せる。物資の整理券配布にも怒号が飛び交う。不適当とか無秩序だとかいう問題ではない。理性を失ってしまうくらい、被災地の状況は困窮を極めていくということだ。突然陥った非日常に混乱し、余裕を失い、切羽詰まっている。大人達はみな狼藉しきっていた。



子ども達は、まだ笑顔を忘れていない。読み語りに白い歯を見せ笑い、炊き出しの甘いおかゆに顔をほころばせる。しかし、それも支援があった一時だけかも知れない。その一時だけでも笑顔を取り戻したことが、子ども達の心の安寧に繋がっていくはずだ。

支援物資を全て配布し終わり、視察を兼ねて一番甚大な被害を被ったタクロバン市内へ。

小雨が降り続く中目にした町は想像を逸するものだった。何もない、そう表現するのが的確である、失われた町並み。瓦礫が道路脇に山となって連なり、道行く人が鼻を押さえる。高潮が襲ってからまだ手の付けられていないであろう、原型を失いゴミと化した建物物が広がる光景。はがれ落ちたトタン屋根に殴り書きされた「HELP」「N

FOOD」の文字。その脇に立ち「食べ物!」と叫び手を伸ばしてくる子ども達。

レイテ島に足を踏み入れるまでは、報道されている悲惨な光景への興味で正直、高揚していた。死傷者数や被害者数・台風の威力を表す数値など、報道に踊る乾いた数字・情報、惨状を伝える映像・報道写真を見聞きし、感覚が麻痺していた。いざ、目の当たりにすると、胸をつき離れなくなったのは「畏怖」。ただただ恐ろしかった。

人間ではとうてい立ち向かえない、自然の持つ絶大な力への畏怖。長きにわたり積み上げてきた人々の営みが、一瞬にして、不可避的な力で破壊されたという事実への恐怖。まるで世界の終焉に片足を浸したかのような不安な気分が町中を包み、それに私も飲み込まれた。

文字では表現しようのないカオスに圧倒され、この町の本来の姿、復旧した姿を想像できなかった。一瞬、光景を垣間見ただけで相当な衝撃を覚えたのだから、では、果たしてこの町に生きる人々は、子ども達は、どれほどのショックを抱えているのだろうか。

そんな心情で車窓を眺めていると、困窮を訴える文字とは異なるものが見えた。

「立ち上がろう、タクロバン」
「祈り続けよう」。

まだここに暮らす人々は諦めていない、いつか訪れる復興の姿を想像して、必死に生きていく。灰色に染まった町の中で、人々の前向きな姿勢、子ども達の笑顔に出会えたことが、何よりの救いであった。

2013年12月8日、台風被災地緊急支援活動から十日が経とうとしている。もう日本では報道が下火になっているという。師走の慌ただしさも相まって、人々の記憶からも徐々に薄れていくだろう。しかし、被災地の混沌は今も続き、暗い夜に涙を流す子どもがまだたくさんいるはずだ。日本が経験した東日本大震災と同じく、長期的・継続的な支援活動が必要である。

灰色の町で迎えるクリスマス。新年が、少しでも被災した子ども達にとって幸せな一時になることを、祈ってやまない。



郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。レイテ台風支援もよろしくお願いします。

(インターネットバンキングも可能です) ■銀行名 ゆうちよ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店(ゼロイチキユウ店) ■口座番号 0018057

愛について、想について (1)

松居友

日本での仕事を終えて、ミンダナオに帰ってくる時、というよりも、「ミンダナオ子ども図書館」に帰ってきて、子どもたちの遊んでいる様子や、笑顔で駆けよってきて抱きつく姿を見ると、心から「ここからホッとするのはなぜだろうか。」

日本に居ると、なぜか孤独感が強くなり、人と人との心の壁ばかりを強く感じる。まるで、どこにいても、互いに自分の壁を作っては塗りかえ塗りかえては作りかえて、よそ向きの顔を見せることに、日々の大抵の神経を使っているような感じ・・・。

その結果、かどうかはわからないが、大勢の人々が町で歩いているにもかかわらず、壺の中に入っているような気分を味わうのは、ほくだけだろうか。



ところが2カ月の講演を終えて、ミンダナオのとりわけ、ミンダナオ子ども図書館に帰ってくると、そのような孤独な壁が、子どもたちがつぎつぎに投げかけてくる愛の雪玉に、あつという間に崩れていく。個人主義の壺が割れて、広がっていく春のぬくもり。さわやかな夏の陽ざし。

ポーチから庭を見下ろすと、マンガーの木の下で緑の草の中で、大勢の子どもたちが草や木や段ボールで、自分たちのオモチャの家を作って遊んでいる。

ポーチから見下ろしているほくに気がつくとき、手をふってさけぶ。「パパとも。お帰りなさい!」「ここが、わたしたちの家よ!」



「パパとも。これからご飯炊いてあげるね。」

「泊まっていたもいいよ。」
こうした子どもたちの姿に心をうたれ、満面笑顔で思わず涙ぐみそうになるのは、ほくだけでは。日本から訪れる訪問者たちも同じ気持ちを感じるようだ。

最近増えてきた若者たちの訪問。彼らは、こちらの子どもたちが発する愛の雪玉によって、心の壁がくずさず、最初はどうしたらよいかわからず、ちよつとビクビクするようだが、すぐに心の奥に閉ざされていた友情の扉が開かれて、いつのまにか満面笑顔で、子どもたちと遊んだり歌ったりしはじめる。



「ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、親が居なくなったり、殺されたり、信じられないような背景から来ているにもかかわらず、このような愛に満ちているのは考えれば考えるほど不思議なのが、なぜだろう。」

こちらの子どもや若者たちに、日本の子どもや若者に自殺が多いということとても驚く。

「なぜなの、あんな豊かな国なのに!何が原因で死んだりするの?」

その原因が、孤独による自殺死だということ、絶句する。

「孤独で死ぬって、どういうこと?」
つまり、親が死んでも、居なくなつて村に放置されても、彼らは孤独を感じない???



郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしく願います。

(インターネットバンキングも可能です) ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店(ゼロイチキユウ店) ■口座番号 0018057

ミンダナオ子ども図書館にいる子どもたちも、普段はとつても明るくて、孤独を感じている様子は一見ないのだけれど、時には、親が居なくて寂しくて、涙ぐんだりするから、孤独や寂しさは感じているのだ。

それにもかかわらず、彼らが死なないのはなぜだろう。どこから生きる力がわいてくるのだろうか。なぜあんなに明るい笑顔が、自然とこぼれてくるのだろうか。

彼らが、孤独を感じない理由は、この地に来てみると少しずつ、少しずつ実感できてくる。それは、たとえ親が居なくても、周囲の仲間や大人たちと、壁のない濃密な人間関係を作れる力。貧しくとも、生活と友情と愛に満ちた



コミュニケーションを培う能力だと思う。

特に、山岳地で3食食べられないような極貧の集落。現金収入がほとんどなく、子どものころから川や湿原で網をはって魚を食べて暮らしているような集落。貧しければ貧しいほど、お金や地位や財産にこだわらず、人々はその日その日を生きている。

貧しい人は幸いだ。天国は彼らのものである、というのは、本当にそうだなあ、と思うときがある。

ミンダナオのすべての子どもたちが、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちのようだとはいわない。

彼らがとりわけこうした心を持っているのは、育つてきた場所のせいでも



あろう。山の中の 電気もない山のコミュニティ。しかし、そこでの生活

は、子どもたちも大人たちも、みんな力をあわせて、水くみをし、洗濯をし、草刈りをし、そして遊ぶ。

遊ぶ場所は、学校でもなく、保育園や幼稚園でもなく、家でもなく、その中間に広がるちまたが遊ぶ空間でもあり、生活するための空間でもある。

ミンダナオ子ども図書館では、訪問者の方々を、こうした集落に案内し、時には若者たちが、村の家々に泊まり、ともにゴムの木を植えたりする事を企画するが、そうすることによって、普段ではとても体験できないような経験を

をして、貧困の現状を理解すると同時に、貧しくともすばらしい愛の力を体



験してもらい知っていく。

日本にも、かつてあったはずの触れあいの力。家でもなく、職場でもなく、学校でもない、ちまたに存在していた友情と愛の空間。そこでこそ、生きる力が養われていく。

生きる力とは、自力で頑張り切り抜ける力ではなく、競争に勝つことでもない。

寂しくなったときや悲しいときに、すぐに気持ちを察して、「いっしょに遊ぼう」「これたべろ」と声をかけてくる事。こちらの子どもたちには、そうした友情の醸す力が実に見事に生きている。

今の日本に、最も欠けてしまったものが、ミンダナオには生きている。



メール : mcl.v.staff@gmail.com

電話番号 : 080-4423-2998 (日本から現地直通)

09219603640 (Tomo Matsui Cell phone in Philippines)

日本事務局 ; Fax 専用 093-473-7710 (内容は本部に転送されます)

「木登りと遺伝子」

ミンダナオの子どもたちはだいたいどんな木にも登れる。

枝が少ない木であろうが、アリが大量にたかる木であろうが、少々幹が細かろうがスルスルと登ってゆく。まるでおさるさんだ。私の仕事部屋からはちようどバイヤバスの木が見える。窓際の特等席からバイヤバスの木に登っていく子どもたちを見ているうちに「なんで子どもたちは木に登るんだろう？」と考えるようになった。

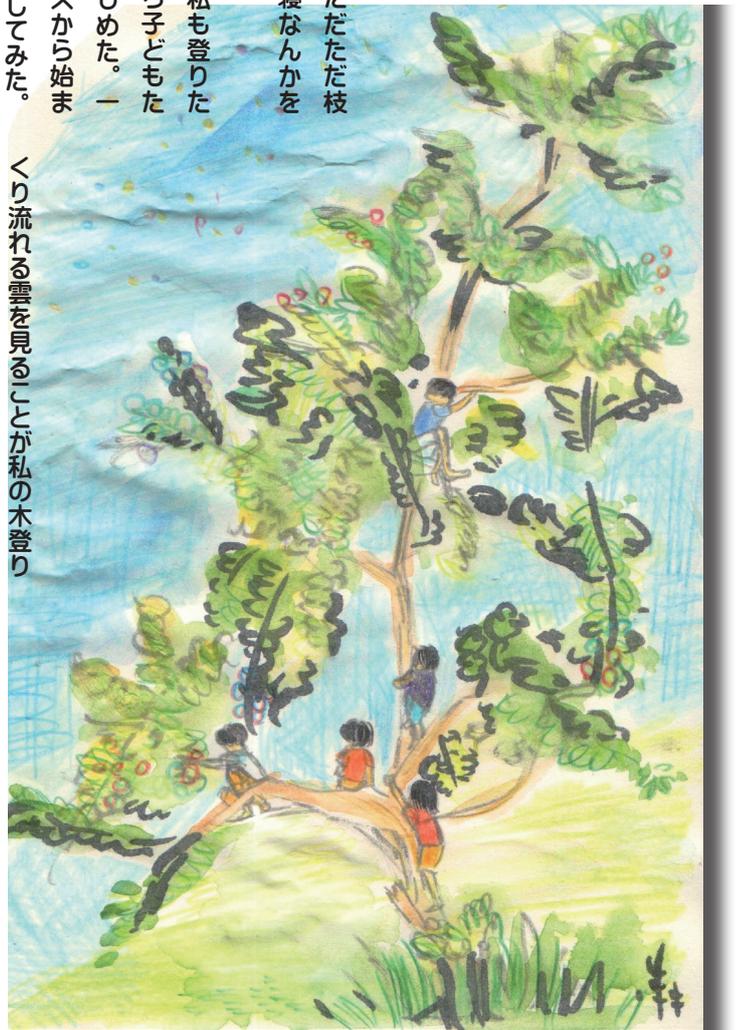
子どもたちが登る木には決まって「えも」が実っている。フルーツだ。MCLの中にも外にもバイヤバス・マングロブ・ドリアンなんかの南国ならではのフルーツの木がたくさんある。ちようどいい食べ頃を子どもたちは知っていて、頃合を見計らってお目当てのフルーツを狩りに登ってゆく。えものを獲得するたいがい木の上で食べる。下で私が見ていると「食べる？」と言って、実を落とすにくれたりもする。大きさを競ったり、誰が一番多く取ったかを競ったりもする。えものを狩る以外の遊び方にはどんなものがあるんだろうと更に観察していくと、かくれんぼの隠れ場所・枝をしな

らせて飛び降りる遊び・ただただ枝にぶら下がる遊び・お昼寝なんかをしていた。

気持ちよさそうだな、私も登りたい！と思って、ある日から子どもたちに交じって木に登りはじめた。一番登り易そうなバイヤバスから始まり、何種類かの木にトライしてみた。

木登りを覚えてから気づいたことがある。木登りは身体はもちろんだが意外に頭を使うということだ。「杉菜！落っこちるよ！」と子どもたちに言われながら、「次にどこに足を置いて、そんであの枝につかまって…」と考えて登らないと本当に落っこちる。

最初は子どもたちの後をついて登った。枝のある場所まで登ると思っただよりも高くて、とても居心地がよくて、景色なんてずっと見ていられる。フルーツ狩りもいいけど、ゆっ



くり流れる雲を見ることが私の木登りの楽しみになりつつある。木の上でのんびり景色を眺めていると、心も開放的になって元気になっていく気がした。ちよつと気分が落ち込んだ日や疲れている日に木に登ると、少し気分が前向きになった。よく木に登る子どもたちはそれを無意識でわかっているんじゃないかと、ふと思ったりもした。

木の上を居心地のよい場所だと感じた時「人間の祖先是木の上で生活していた」という話を大学で習ったのを思い出した。恐竜が絶滅した後も人間の祖先是豊かな森の中、食料も豊富で

敵も少ない木の上ですつと生活していた。人間の祖先是木から降りてきたのはつい500万年前の話である。その時の遺伝子が私やミンダナオの子どもたちの中にもまだあるのかと思うと、ちよつとしたロマンだ…私がかっこに来たのも遺伝子のせい…？なんて、停電の中満点の星空を見て思いつく、そんなミンダナオの日々。

ボランティアスタッフ

野田 杉菜

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブサイト検索 『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!

スカラシップ・里子支援



sherwin baylon

小学校1年・2007年生、クリスチャン
父親が些細なことで殺されて母親は、保育園
の先生をしながら6人の子どもを育てている



ahira baylon



Annabal Bagan

小学2年・2005生
両親は居るが貧しい
先生になりたい
クリスチャン



princess rafael

小学5年・2001年生
父親は殺された。
成績は良い
クリスチャン



Aiza T. Mardo

小学1年・2005年生
マ/ボ族とセファ/族の混血。
生まれながらの障害



Newerlyn Mumar

高校1年・マ/ボ族
父は死亡し困窮
成績は良い
先生になりたい



sandel iniao

高校2年・マ/ボ族
母親はいなくなり
父親は精神疾患
MCLに住む



Jessiber B. Tula

高校1年・1999生
マ/ボ族・経済的に貧
しい・ソーシャルワ
カになりたい



Regine Bea Villena

高校1年・2000生
マ/ボ族+マギャン族
両親は離別し、母親の
みで生活は厳しい



Roslyn A. Adtog

高校一年・1998生
イスラム教徒
貧しく学校に行けない
戦闘の多い地域



Amer p. Cadite

大学1年・1995生
イスラム・成績は良い
父は病死
母親が漁をして生計



Rasmia Hashim

大学1年 / イスラム
戦闘で父親は死亡
生活は厳しい
成績は良い



Japhet Merced

大学1年・タガバワ族
両親は死亡
成績は良い
3人兄弟はバラバラ



Lilibeth A. Camino

大学1年 / クリスチャン
父は死亡・母は不明
苦勞して高校を卒業
生まれつき足に傷害



Jay-ar D. Sibya

大学1年・1996生
ピサヤ族
貧しく生活が厳しい
看護師になりたい

スカラシップ・里子支援の方法

子どもの紹介は、ウェブサイトの「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にも、最新の情報を乗せています。
「検索：ミンダナオ子ども図書館」 <http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm> から
「まだ支援者のいない子たちへ Go！」 をクリックして入ります。パスワードは、mindanao
 奨学生の決定は先着順とさせていただきますので、サイトから「支援申し込み」をクリックして記入し、通信欄に希
 望の子の名前を書いてウェブメールしていただくか、次のアドレスに直接メールしてください。折り返しスタッフか
 ら返事を送ります。**メール：mcl.v.staff@gmail.com**
 郵便振替用紙に、「スカラシップ」または「里子」と書いて、支援額の一部を振り込んでいただいても可能ですが、現
 地からの郵送のために返事は2ヵ月ほどかかります。学年、男女、境遇、年齢、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民
 族など希望があればお書きください。出来るだけご希望に添う子を、紹介させていただきます。
 機関誌上の「この子を支援したい」場合は、振替用紙の通信欄に子どもの名前を書いてお送りください。ただしす
 でに支援者が決まった子の場合は、別の子をご相談させていただきます。

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。

(インターネットバンキングも可能です) ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 O一九店(ゼロイチキユウ店) ■口座番号 0018057

日本について考えさせられた

松居陽

アイデンティティ。半分気づかずに持っているもの。ゲームには、欠かせない。白か黒か、赤か緑か。こっちがわたしで、あっちがあなた。

その分離に生まれる、争いの苦しみと、再会の喜び。勝っても負けても引き分けでも、いつか、ふりだしに戻ってしまう。何も、アイデンティティをすり抜けない状態へ。日本に行って特に考えさせられたのは、支援する者とされる者のアイデンティティについてだ。

これまでも多くのNGOが、そういったイメージを売ってきたからかも知れないが、発展途上国の子どもたちが「かわいそう」だというコンセプトがある。彼らの「陥っている現状」がいかに先進国の味わっている「豊かさ」に比べ、かわいそうなものであるか、というものだ。

それは、先進国にとって、ある意味都合のいい観点だ。他国の現実を否定することで、自分たちの現実が正当化される。自分たちの持っている、より優れたものを分け与えてあげようと、一方向的な正

義感に動けば、かわいそうな人々を助ける、ヒーローと名乗れる。

ここで出来上がったしまうのが、支援する者とされる者の、上下関係だ。それも、非常に見逃しやすく、定着しているカーストだと思う。

「げんきなやさい」を見ても分かるが、フィリピンにいと、どんなに年上の人でも、僕のことを「サー」と敬礼する。それが、習わしなのだ。

植民地化を多く経験してきたことや、国内の富の格差など、様々な理由が挙げられるが、とにかく、外国人イコール力や富を持ち、特に僕が感じるのが、何かをくれる人、支援してくれる人、なのだ。そして、その上下感覚が、ぼくはどうしても好きになれない。

逆に、日本へ行けば、やはりミンダナオ

の子どもたちイコールかわいいけどかわいそうという、下にいる存在にイメージされていることが多い。

「げんきなやさい」は、特にそこを意識して、かわいそうなんかじゃない、美しく、生命力にあふれた子ともたちの姿を表現しようとした。

上映会でも、そこを理解した、というより感じてくれた人が多く、うれしかった。

僕はただ、最初に日本の人たちがミンダナオの子供たちに出会い、触れる機会が、「支援する者」としてであってほしくないと思う。

そして、ミンダナオの子供たちが初めて日本の人に接するのが、「支援されるもの」としてであってほしくない。

子どもの時そういった感覚が定着してしまうのが、悲しい気がする。そこから生まれた分離感が、思春期に入ってコンプレックスになったり、上下意識の存続の原因になりかねない。

まず、友達として出会ってほしい。

特に、これからは、日本の子供たちが、ミンダナオ、そして世界中の子供たちと、遊び仲間として出会う機会を増やすべきだ、と感じる。それも、大人の指導なしの、ピュアな関係だ。

小さい時の友達というのは特殊で、受験時代、就職後に出会う、半ば競争相手のような関係ではない。

小学校の同窓会でも、みんな社会上いろいろな立場にいたにしても、何か変わらない一体感が漂う。

そのように、世界中に友達を持った子どもたちが、あらゆる分離感を超え、成長し、世界を愛によって一つにしていくってくれるんじゃないか、と希望を持っていて。

ユニティは、自分を知る前、アイデンティティを得る前から、あった。分離は、できていなかった。

そう、思い込んでいただけなんだ。先へ進むだけが、成長じゃない。我に返ることも、必要だ。



山菜売りの少女 7

前号からの続き

だまってしまった子どもたちを見
て、お母さんはたずねた。

「学校に行きたいの?」

ギンギンとクリステインとジョイ
ジョイは、首をたてにふった。

けれども、七人の男の子たちは、激
しく首を横にふった。

お母さんは、大笑いをする
と山菜売りの子たちにたずねた。

「なぜ、学校に行きたいの?」

「少しでも良い仕事について、家
族をたすけたいの。」

「だったら、ミンダナオ子ども図書
館に行ってみたらいいのに。」

うちの娘のジサは、眼に白い膜が出
来て、手術も出来ないし、お金もなく

て学校にも行けなかったの。

だけど、クリスマスを市役所の前の
広場で、絵本の読み聞かせがあつて、
MCLの子どもたちがやってきたと
き、スタッフの人が見つけてくれてな
おしてくれた。

学校にも行けるようにしてくれたの
よ。」

「ミンダナオ子ども図書館って、な
に?」

ジョイジョイがたずねた。

「MCLともいつてねえ。貧しい山
の村の木の下や、町の広場のスト
リートチルドレンなんかには、歌ったり
絵本の読み聞かせしたりしている人た
ちよ。」

それだけじゃなくて、貧しい子ど
もたちのなかでも、とりわけ親のいな
い子や片親の子たち、三食たべられな
いような家族の子たちを学校に行かせ
てくれるの。しかも、大学までね。

娘のジサみたいに、病気があつても
手術できない子を、病院に連れて行っ
てくれたりもするのよ。」

「へえ、MCLって、ミンダナオ子
ども図書館のことなのね。」

でも、なんだか見たことある名前だ
なあ。それって、どこにあるの?」

「マノンゴル村よ。」

「あつ!」

ギンギンがさげんだ。

「今日ここにくるまえに、大きな岩
のそばを通っていった子どもたち!」

「そういえば、リックサックに、M
CLって書いてあつた!」クリステイ
ンもいった。

お母さんは、七人のストリートチル
ドレンの方を見ると、いった。

「あなたたちも、学校にいったらう?
男の子たちは、激しく、首を横にふっ

た。

まわりでようすを見ていた人たち
も、大笑いをしている。

そのなかの、焼き鳥を口にほおぼっ
ている男が、大声でいった。

「学校に行ったからって、どうって
ことないからなあ。」

すると、そのとなりの工事現場の日
雇い職人ふうの男が、受け答えた。

「でも、金持ちだけが、大学教育を
受けられて、良いところに就職でき
るってのも、変だよなあ。」

さらに、その後ろに立つてようすを
見ていた、肩に、オートバイの重い部
品を背負っている、油で汚れた男が
いった。

「おまえたちのような、社会から見
捨てられたようなのが、大学を出て良
い働きをしたら、少しは社会がよくな
るかもしれないぞ。」

ストリートチルドレンの少年たち
が、口をはさんだ。

「ミンダナオ子ども図書館って、聞
いたことあるよ。」

ぼくらの仲間だったスイーツも、今
はミンダナオ子ども図書館に住んで小
学校にかよっているんだって。」

「今年小学校を卒業したら、6月か
ら高校生で、高校を卒業したら、今度
は大学まで行かせてくれるんだって。
彼女、将来は看護婦になるって、大
はりきりだよ。」

「彼女、お父さんが死んで、お母さ
んは、頭がおかしくなつてしまつたん
だ。」

外国に売られそうになったとき、ミ
ンダナオ子ども図書館が助けてくれ
た、って言つた。

大学出て大人になったら、お母さん
と暮らすんだって。」

「いっしょにミンダナオ子ども図書
館に行ってみようか。スイーツに会え
るかもしれない。偉くなりたいとは思
わないし、学校にも行かないけどね。」
「マノンゴル村はわかるけど、村の
どこにあるのかあ。」

「ボスだったら、場所を知ってるか
もしれないよ。聞いてみよう。」

「そうだ、それがいい。」

つづく

メール : mcl.v.staff@gmail.com

電話番号 : 080-4423-2998 (日本から現地直通)

09219603640 (Tomo Matsui Cell phone in Philippines)

日本事務局 ; Fax 専用 093-473-7710 (内容は本部に転送されます)

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
三食たべられないときと、
学校に行けないとき、
そして、病気を治すことが出来ないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）**
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった全ての方々には、
年5回、4月、6月、8月、10月、12月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
（ときには、現地のドキュメンタリーDVDや絵本も定価なしでお送りします！）
- 2、大学生・高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年5回の機関誌に同封して本人からの手紙、それ以外に6月に成績表、8月に写真、12月
に新年カードなどが届きます。新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届け。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、年5回の機関
誌に同封して、8月に写真、12月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
プレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため、返事は半
年ほど後になる可能性もあります。訪問の際は自宅にご案内いたします。
- 4、保育所・下宿小屋建設支援・・・40万円（資材高騰と建設後の修理代を加えました）**
振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、
自由寄付同様に、年5回機関誌をお送りすると同時に、10月には毎年現地の保育所や下宿
小屋の写真報告をお届けします。開所式参加や訪問も可能です。数年ごとに修復しています。
- 5、植林環境支援・・・6万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代を加えました）**
洪水対策と同時に、先住民が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。
- 6、古着等の物資支援・・・フィリピン宅配が便利です。**

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>
メール：mcl.v.staff@gmail.com

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、メールが最適です
mcl.v.staff@gmail.com

電話：080-4423-2998(日本および現地転送・松居友)

日本事務局；Fax専用 093-473-7710(内容は本部に転送されます)

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines